

エリオ・オイチシカによる《パラングレ》にみられる「遊び」に関する考察——文化人類学と精神分析の観点から——

山野井 千晶 (東京芸術大学)

---

ブラジル出身のアーティストであるエリオ・オイチシカ(1937-1980)が、1964年以降断続的に制作したシリーズが《パラングレ》である。《パラングレ》は様々な布素材を組み合わせた着用可能な作品であり、オイチシカはファヴェーラ(貧民街)の住民とともにこれを着てサンバを踊りながら街の中を歩き回ることを意図していた。この試みは、1964年の軍事クーデター以降に抑圧的政治と社会への抵抗として興隆した革新的な芸術運動、トロピカリア・ムーブメントを背景にしていた。またオイチシカ自身の発言から、人種的混雑性を持つラテン・アメリカという場所と関連し、プロテスト的側面を持っていたことが確認されている。オイチシカ作品全般に見られるこうした側面については、近年では欧米を中心に再評価や再考の動きが高まってきている。

しかしこのオイチシカが、先行するブラジルのアーティスト、リジア・クラーク(1920-1988)と交わっていた書簡によれば、ふたりの芸術理論の核には「参加」の概念があった。さらにふたりの作品の特質を考え合わせるなら、この「参加」においては、参加者が生身の身体を通して作品を経験する場を、アーティストが提供することが最重要である。この点で《パラングレ》は、社会政治的主張を示す行為としての同時代のブラジルのパフォーマンスとは区別される。オイチシカはサンバのディオニュソス性について言及しつつ、《パラングレ》を装着してのダンスを「自己中心的な行為」としてのそれではなく、「遊びの能力の独創的な解放」として定義した。彼の《パラングレ》は抵抗の意思を示すだけでなく、身に纏うことで個人のアイデンティティを覆い隠し、サンバの音楽とダンスによって「遊び」の側面を持つ。《パラングレ》は「遊び」であることにより、自他融解のプロセスへ参加者を導き、その精神内部における抑圧から解放する。文化人類学者のロジェ・カイヨワや精神分析医のドナルド・ウィニコットらは、それぞれの分野で「遊び」という概念について重要な知見を示しているが、オイチシカ自身の言葉に加えてこれらの知見を参照し、「遊び」という現象を再検討することによって、《パラングレ》が抵抗であると同時に参加者の内面への変化をもたらすという、二つの性質を有していることが見出せるのではないだろうか。

本発表では以上のような観点から、まず多くのシリーズが存在する《パラングレ》作品の特質そのものに加え、その成立背景を歴史的・地理的視点から確認し、同時代ブラジルの社会政治批判的作品とも比較する。そのうえで、オイチシカとクラークの

作品および書簡における交流を精査するとともに、先行研究ではあまり論じられていなかった「遊び」の観点から、《パランゴレ》における個人の精神へと働きかけ、自己の形成へと導く性質について考察したい。